HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	幼犬の特別養護老人ホーム長期訪問活動の効果
Author(s)	新山, 雅美; 森田, 茂; 内田, 英二 他
Citation	高齢者問題研究, 15, 107-120
Issue Date	1999
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/32852
Type	journal article
File Information	koreisha107.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

高齢者問題研究　No.15　1999, 107～120

幼犬の特別養護老人ホーム長期訪問活動の効果

新山　雅美*　森田　　茂*　内田　英二*　小田　史朗**
森谷　　絜**　竹川　忠男***　杉山　善朗***

The Effects of Visiting Puppies on Elderly Residents and Volunteers in a Specialized Nursing Home

Masayoshi NIIYAMA, Shigeru MORITA, Eiji UCHIDA
Rakuno Gakuen University
Shiro ODA, Kiyoshi MORIYA
Hokkaido University
Tadao TAKEKAWA, Yoshio SUGIYAMA
Hokkaido Women's University

Abstract

One to four puppies of various ages were exhibited in an acrylic plastic pen of 180cm×65cm×60cm, from 10 a.m. to 12 p.m. and from 1 p.m. to 4 p.m. in a Specialized Nursing Home. Sixty six of seventy eight handicapped elderly residents, including some with dementia, attended the exhibition. Thirty six percent of the participants showed positive reactions to the puppies and enjoyed interaction with the volunteers. The acutely lonely residents with progressed dementia stayed over 40 minutes interacting with volunteers.

On the first day of the exhibition, volunteers without experience in the care of the elderly in the specialized nursing home, complained of emotional fatigue due to difficulty in communication with the residents. After 3 days, the volunteers gained self-confidence, suggesting that more experience in this type of care is desirable before such an exhibition in order for volunteers to realize the special physical or mental conditions of elderly residents.

Key words : Animal assisted action, Exhibition of puppies, Nursing home, Volunteer

キーワード：動物介在活動，子犬の訪問，特別養護老人ホーム，ボランティア活動

I　研究の目的

高齢者入所施設での犬の訪問や飼育が動物介在活動（Animal Assisted Action）の一環として普及しつつある[1)]。北海道でも先駆的な実践活動がすでになされており，社会福祉協議会などの体験発表会でもその活動が報告されている[2)]。ところで施設内での訓練された犬の存在は入居者の精神的な安寧の向上にとって良いことではあるが，施設内飼育では，動物に関連した微生物が定着しやすく，動物の衛生的な管理がとりわけ重要な課題となって来る。しかし施設内飼育に対応する施設設備や人的余裕が乏しい施設も少なくない。特別養護老人ホームでは，入居者の身体機能障害が重度であり，また痴呆症状のある人達が多く，介護職員の精神的な疲労は過重である。そこで施設

*酪農学園大学　**北海道大学　***北海道女子大学

職員に犬飼育関連作業を負担させることのない，ボランティアによる犬の訪問活動の利用が考えられる。ところで訪問を長期間継続するためにはボランティア自身のやりがい意識の育成や物理的な拘束感の軽減などが課題になる。

この研究では，犬の訪問活動が入居者の精神的な安定とそれによる介護者のストレスの軽減が期待できるか，また参加したボランティアにどのような心理的な影響を及ぼすのかを調査し，訪問活動を長期間持続させるための問題点を洗い出すことを目的とした。

Ⅱ　研究方法

1　子犬展示方法

ホームでの犬の活用といっても，入居者の障害の程度や施設の諸事情によって活用の形態は一様ではないと考えられる。筆者らは，特別養護老人ホームの，清掃し易く入居者の集合しやすい場所に，複数の健康な子犬を一定時間展示することを試みた。成犬ではなく，複数の子犬を展示することにしたのは，未訓練でも使用できること，犬の行動が活発であり，子犬同士の「戯れあい」と「睡眠」のいずれもが高齢者の精神状態に適度の良い刺激を与えるのではないかと考えたためである。ところで未訓練の子犬を無拘束に行動させた場合には，子犬と入居者との接触や衝突などによる転倒事故の可能性の他に，視力の弱った人には恐怖心を与えかねない。また，排泄物の拡散は不可避である。そこで子犬をアクリル製囲いの中に入れて展示し，時折ボランティアが入居者に手渡しをする方法を試みた。(図1)

図1　子犬の展示風景

2　訪問日，展示時間，展示子犬および作業内容

子犬の訪問時期は表1に，子犬訪問日の作業の

表1　特別養護老人ホームへの子犬訪問日と展示子犬

訪問日	展示時間	展示小犬
予備試験		
3.9－10	10:00－16:00	ビーグル　12週齢同腹4頭
4.2－3	10:00－16:00	雑種　4週齢同腹4頭
4.19	10:00－16:00	雑種　6週齢同腹4頭
本試験		
7.17	18:00－19:00 説明会	
7.21－22	9:30－17:00 介護体験期間	
7.27－29	10:00－16:00 第1次展示	雑種　9週齢同腹2頭
		雑種　10週齢　1頭
8.3－5	10:00－16:00 第2次展示	雑種　10週齢同腹2頭
		雑種　11週齢　1頭
8.10－12	10:00－16:00 第3次展示	雑種　11週齢同腹2頭
		雑種　12週齢　1頭
8.17－19	10:00－16:00 第4次展示	雑種　12週齢同腹2頭
		雑種　13週齢　1頭

脚注：
＊1　子犬の展示を1個所で実施した。
＊2　子犬の展示を同時に2個所で実施した。毎週同一犬である。
　　1個所では同腹の2頭を、2個所目では1頭を使用した。

概要を表2に示した。(表1，表2)
予備試験では，子犬の展示方法，展示時の映像および書面所見記録方法を検討した。本試験では公募した学生ボランティアが参加した。

3　子犬管理方法と展示時の衛生管理

訪問には健康な子犬を用いた。子犬は飼主宅で早朝給餌と排泄を済ませ,全身洗浄し，乾燥させて，同時に洗浄した組み立て式運搬箱に入れ,接地させることなく展示場所に運んだ。展示場所に消毒剤で清拭したビニール製の床材（クッションフロア）を敷き，そこに幅180cm，奥行き内寸65cm，高さ60cmのアクリル製の囲いを組み立てて子犬を入れた。子犬の排泄物は速やかに拭き取り，消毒薬を含ませた布で清拭した。また入居者が子犬に触れた場合は，退去の際に両手を消毒薬を含んだ紙タオル（ウエット・ティッシュ）で拭くことを励行した。

4　入居者の誘導

子犬展示場所への移動は，自立性のある人は自発性に委ね，困難な人は介護者が誘導し，入居者が飽きて来た様子を見て，あるいは入浴，食事，排泄の必要性に応じてボランティアから介護者に引き継いで退去させた。

5　入居者への影響調査方法

入居者へのアンケート調査　入居者への心理学的アンケート調査を犬展示場への参加前および参加後に実施した。入居者に対して動物の飼育歴およびイヌの好き嫌いを本人あるいは家族からの聞き取りで調査した。またイヌの展示場における入居者の関心度の高さを子犬の側で過ごした時間や自発的な反応および表情の変化を書面とビデオ画像で記録した。痴呆度は柄澤式「老人知能の臨床的判定基準」，ADL度は平成3年11月18日老健第102－2号「障害老人の日常生活自立度（寝たきり度）判定基準」により判定した。展示場所に参加した入居者の反応は，5人の介護者が，書面記録および録画から，反応が乏しい，反応が有る，反応明瞭，の3段階に評価した。

6　子犬の展示頭数，発育および運動量と入居者の反応

子犬の展示頭数や発育に対する入居者の反応を，予備試験期から本試験期にかけて参加している5名の学生ボランティアへの聞き取りで調査した。また録画から，13時から15時までの2時間に子犬が囲いの中で動く運動量を移動距離の計測で調査した。

7　ボランティアへの影響調査

札幌福祉専門学校，北海道女子大学，札幌学院大学，北星学園大学，北海道医療大学，北海道大学医療短期大学部，帯広畜産大学，酪農学園大学の学生が公募ボランティアとして参加した。ボランティアには子犬展示前に事前説明会を持ったあと，1日間の特別養護の介護体験を課し，その後の3日間は子犬展示場で子犬を介した入居者との

表2　子犬訪問日の作業概要

時間	作業内容
8:00	給餌，排泄，全身洗浄，乾燥。子犬を清浄容器で運搬
9:00	アクリル囲い組み立て，2階ホール南側窓下に設置。子犬搬入。
10:00	展示開始と同時に子犬の運動量および展示場全体をビデオ録画 初めは入居者の自発的行為の発現を待つ 次に子犬を抱いてもらう，子犬は顔に近づけず膝の上に 入居者来訪開始と終了時間，自発的行動を書面記録
12:00－13:00	休憩時間
13:00－16:00	午後の展示
16:00	展示終了（囲いを清拭）
16:10－16:30	ボランティア意見交換と感想文記入
17:00　撤収	子犬を連れて帰る

対話を体験してもらった。学生ボランティア27名を対象にアンケートを実施し18名から全回答を得た。アンケートは事前説明会後，１日介護体験後および幼犬展示１日目終了後および３日目の終了後に行い，同時に感想文も提出してもらった。

学生ボランティアに対するアンケート調査用紙の内容は，①介護終了時の気分（質問数12），②介護終了時の心身状態（７），③当日のボランティア活動に対する感想（10），④今後のボランティア活動に対する意欲（７），⑤高齢者問題への関心度（７）の５項目にわたる質問数43で構成されていた。すべての質問は，1.よくあてはまる，2.少しあてはまる，3.あまりあてはまらない，4.まったくあてはまらない，の４段階で評価してもらった。１あるいは２を選択した者は肯定群，３あるいは４を否定群として検討した。

8　介護職員への影響調査

介護職員が多忙で子犬展示時間に入居者に付き添うことが出来ず，十分な調査成績が得られなかった。

Ⅲ　成　　績

１－１　入居者の状況：

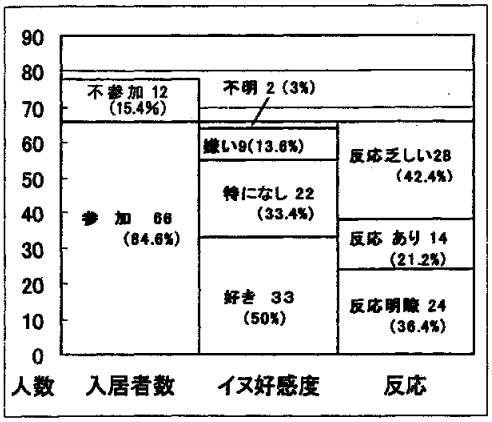
予備試験期間および本試験期間の入居者は78名でそのうち約70%に痴呆があると判定された。入居者の車椅子使用者の割合は約50%であった。子犬展示場所には，症状の重い人を除いた66名が参加した。参加者の50%（入居者の42%）が「犬が好き」，33%（入居者の28%）が「特に好き嫌いなし」と答えており，「犬が嫌い」の回答と不明者は参加者の17%（入居者の14%）であった。（図２）

１－２　入居者の子犬展示への反応：

入居者対象の心理テストアンケートを実施したが入居者の大部分が回答困難であった。

１－３　犬への好感度と展示への反応：

展示に対して興味を示した「反応明瞭」と「反応あり」の入居者は展示場滞在者の58%（入居者の49%）であり，入居者の30%が「反応明瞭で良好」と判定された。滞在者のうち50%が「犬は好き」と答えているが，反応が明らかに良いと判定された数はこれを下回っていた。これは犬への好感度を調査した時点より子犬の展示場所に滞在した時点での体調の低下が大きく影響しているものと考えられる。



脚注：イヌ好感度および反応の%は参加者に対する割合

図２　参加者数、犬への好感度および反応

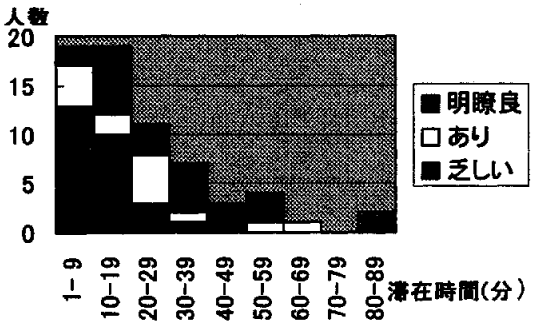


図３　滞在時間と子犬への反応

１－４　子犬展示場所での滞在時間：

滞在時間と犬への反応との関係を図３に示した。参加66人中49人（74%）が30分以内の滞在であった。滞在時間30分以内の人達の中にはイヌ嫌いで反応の乏しい人が介護者の誘導に大きく左右されて滞在していたり，逆に非常に犬好きであっても一頻り子犬を話題にして短時間談笑し，後は自身の生活リズムに従って退場する痴呆がなく自立性の高い人とが含まれていた。40分以上滞在している人はやはり犬が好きと答えた人で反応が明瞭な

表3　滞在時間と痴呆度

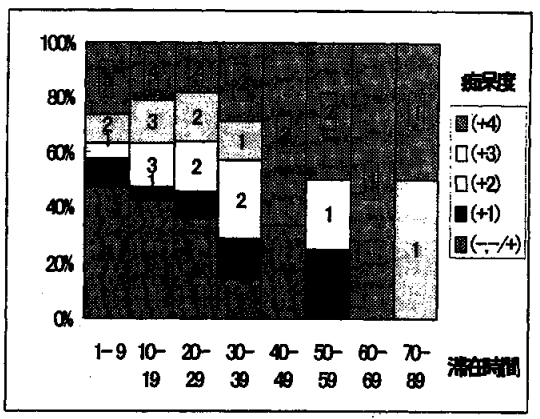
滞在時間(分)	痴呆度					滞在者数計
	(−,−/+)	(+1)	(+2)	(+3)	(+4)	
1− 9	9	2	1	2	5	19
10−19	8	1	3	3	4	19
20−29	4	1	2	2	2	11
30−39	1	1	2	1	2	7
40−49	1	0	0	0	2	3
50−59	0	1	1	0	2	4
60−69	0	0	0	0	1	1
70−89	0	0	0	1	1	2
痴呆度別人数	23	6	9	9	19	66

人の比率が高かった。子犬展示場滞在時間別の滞在者の痴呆度を表3および図4に，またADL度との関係を表4に示した。歩行障害が少なく痴呆が中から重度で徘徊が現われている入居者や犬をそれほど好きでなくとも展示で集まっていることに興味を覚える入居者で子犬の側で過ごす時間が長い傾向にあった。

1－5　事　例

子犬の展示に明瞭な反応を示す入居者であっても，反応は人により異なり，複雑である。そこで特徴的な6タイプの事例を紹介する。

事例　A：犬飼育歴があり，犬好きである。痴呆がなく障害はADLでA1。子犬展示の場が入居者の相互融和の場になる上で繋ぎ手として重要な役割を果たしている。「日ごとに大きくなるねー」，「エンジェルちゃん，会いに来ました」と言いながら囲いに近づく。子犬達がおもちゃを取り合うのを「わはははは」と声をあげて笑う。「Mさん，こっちー」と他の入居者に呼びかける。椅子から立ちあがって犬をお座りさせてジャーキーをあげる。子犬がお座りして食べると一同笑いが



脚注：グラフ内の数値は滞在者数を示す。

図4　滞在時間と痴呆度

表4　滞在時間とADL

滞在時間(分)	ADL									滞在者数計
	J1	J2	A1	A2	B1	B2	C1	C2	不明	
1− 9	0	1	2	3	2	4	2	3	2	19
10−19	0	2	3	0	5	7	1	1	0	19
20−29	0	0	2	1	2	4	0	2	0	11
30−39	0	0	0	1	1	3	0	2	0	7
40−49	1	0	1	0	1	0	0	0	0	3
50−59	0	0	2	1	0	1	0	0	0	4
60−69	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
70−89	0	0	2	0	0	0	0	0	0	2
ADL毎人数	1	3	12	7	11	19	3	8	2	66

出る。「どうしたの。めんこい顔して」，「どっから見ても可愛い。何ともいえない顔してるね。」と抱き上げて，接吻する。他の入居者の抱く子犬の頭も撫でる。犬に話かけたり，ボランティアに話かけたりする。「お茶の時間だから行くわ。見ているときりがないからね。」と退席する。

次はいずれも長時間滞在した事例である。

事例B：犬飼育歴があり，犬好きである。難聴で痴呆中程度，ADLはB1。食堂にいて静かで，言葉も笑顔も少ない。自発的積極的な行動や問題行動はなく目立たない存在である。自分と1対1の関係にあるものだけが認識出来るのか，正面から顔を合わせた時には表情が豊かになる。犬の囲いの前で笑顔豊かになる。自発的に杖を囲いに入れて子犬に噛ませて動かし，喉の奥で「クックック」といった小さな笑い声を絶えず発している。犬のおもちゃの骨型ガムを手に持たせてあげると片方を子犬に咥えさせて引張り合い，「ほら，お前なんかに取れるか」と小声で呟いている。子犬が他の入所者の手に渡った途端に無表情に戻る。

事例C：犬飼育歴があり，犬好きである。痴呆重度と進行性腫瘍があり，ADLはA1。子犬の訪問がガン末期の不安を緩和した事例と思われる。他の入居者とはあまり会話が無い。「ワンちゃん，いますよ。」のボランティアの声掛けに「いや，いい」と通り過ぎるが，すぐに戻って自分から囲いに近づく。子犬を見た瞬間「大きいね」と言い椅子に座る。子犬同士の軍手の取り合いをみて，「やれ！，やれ！」，「出したらどっかへいっちゃうだろうね」と言う。軍手を子犬の方へ投げてみるが，捕って来ないので「見てなかったんだら，ダメ」と言う。手を何度も叩き，犬の動きに合わせて目を動かす。犬が自分を見ると笑顔を見せる。子犬が横になると手を叩いて，「起きれ，起きれ，こら，ワンワン」と言って起こす。足踏みをして犬をからかう。「ちょっと貸して」と自分から子犬を抱き，優しく膝の上に置く。「重たいね」と言う。写真を撮ろうとした時に子犬が正面を向くと，「こら，お前お利口だな」と言う。子犬を膝に載せたまま眠ってしまう。

事例D：犬飼育歴はなく，犬好きである。痴呆は中程度でADLはA2。普段から笑顔があり，介護者への会話も多く，大変愛敬のある寂しがりで世話好きな人柄である。犬の側に居ることがとても気に入った様子で，午前中もお茶会の後，すぐに，また昼食後の昼寝の直後に，自ら犬の側に来る。午後のお茶会の始まる頃に食堂に誘導したが，また直ぐに犬の側に戻っていた。昔色々な動物を飼っていたらしく「犬は好きでも嫌いでもない」と言いながらも，初めから抵抗無く犬に触る。しかし，初めからそうしようという意志は恐らく無く，人が集まっているからその中に入りたくて来ていた様子。「一人でいても仕方がないんだからね」と言う。だんだんと自分から撫でたり，オモチャで遊んだり，餌をあげたりするようになり，今は自分で子犬を囲いの中から抱き上げる。「何もあげる物が無い」，とよく言い，「乳をあげようか」と赤ちゃんを抱くようにする。またボランティアを介さずに全く自分だけで他の入居者に話し掛けるという行動が出てきた。

事例EおよびFは犬好きではないが展示の雰囲気に誘われて滞在した例である。

事例E：犬飼育歴がなく，特に犬好きではない。痴呆は重度で，ADLはA1。普段は午前中だけでも自室からの出入りは6－7回。自室と食堂との往復4回。話しをするのが好きでボランティアとよく話すが同室の人との話はほんの数秒程度である。初期の子犬展示の時はたびたび見に来るが犬には手を出さず，離れた場所にいた。訪問の回を重ねる毎に頻繁に訪れて囲いの一部に居場所が定着する。囲いの前を通りかかった時に子犬が囲いに跳びつくと，びっくりする。「抱いてみっかなー。かわいいもんな。」と言い，犬を抱く。「かっちゃくなあ」と両手で前後からしっかり抱く。他人の抱く犬にも手を出して，「あー，舌でペロペロなめてる」と笑顔で言う。犬の居る場に来ても，犬を見ているよりもボランティアと話している時間の方が長い。また他の入居者が皆帰り

出すと，自分も居室まで帰るが，2－3分したら，また来る。彼女にとって子犬のいる場所は，そこに話し相手の人がいるということで，安心する場所を見つけているように思われる。

事例F：犬飼育歴はなく，犬には噛まれたことがあり，苦手。痴呆がなくADLはA1。しばしば立ち寄って，「犬は何の種類，メスなの」と尋ね，「ワンワン」と犬の鳴き声をして，犬を呼ぼうとする。始めは遠くから見ているが，徐々に自分から側に寄っていく。犬を側に持っていくと，「逃げよう」と言って笑う。触ろうとしない。ボランティアが隣で犬をあやしているのを熱心に見ているが，子犬よりもボランティアの関心を惹きつけようとする行動が頻繁にみられた。

2－1　子犬の発育と入居者の反応

子犬の行動は週齢によって違いが認められた。これに対応するように入居者の反応も異なったものとなった。2－4週齢の子犬はただもぞもぞ動き回るだけであり，入居者は不思議な生き物として眺めていた。動きが緩慢なので身障者であっても介助しさえすれば膝の上に載せたり，胸に抱きかかえたりして体の温もりや被毛の感触を楽しんでもらうことが出来た。6週齢になると子犬は尾を振り，活発に人への接触を求めるようになり，また子犬同士の戯れ合いも頻繁で，眺めていてもまた抱いてもまだ腕の中に収まり，入居者にとっては最良の遊び相手になった。8週齢以降になると子犬はより活発になって抱いたり膝の上留めておくことが次第に困難になった。12週齢の子犬は若干の命令語「お座り」，「待て」，「よし」を実行出来るようになり，発声の出来る入居者とはより良好な関係が成立した。子犬の運動量をみると，8週齢の子犬では人との接触のない状態ではほとんどが横になって寝ていて囲い内での移動距離は20m程度で人の気配で起きる程度であった。しかし，展示場所では移動距離は増加した。展示場所での移動距離は9，10，11，12週齢に応じて約30，60，75，80mと増加した。

2－2　犬の展示頭数と入居者の反応

予備試験および本試験では展示子犬の数が異なった。展示子犬の数が入居者におよぼす影響について，5人のボランティアの意見を集約した。①子犬が1頭の場合は自分の動作に子犬が反応したり抱くと嬉しいが，周りの人が羨ましく見ており，長時間子犬を独占させることが難しい。子犬も遊び相手になる子犬がいないので退屈してすぐ寝てしまう。入居者にとって寝る姿を見ることは短時間なら楽しいが，長時間寝ているのを見ていると退屈する。②子犬が2頭の場合は2頭の動作の比較で，寝ている時でさえ寄り添って寝ていたり違う格好で寝ているので見飽きない。子犬が自分の方を向いて尾を振り，寄ってくる喜びは2頭だと一層大きい。また2頭の子犬が戯れ合うと微笑ましく見える。1頭よりも長時間犬に触れることが出来る。しかし見に来る人が多いと，2頭でも順番に抱かれて休む暇がなく，子犬の負担が大きい。③子犬が3，4頭の場合の有利な点は2頭の場合とほぼ同じであるが，子犬の個性が現れて，楽しい。また子犬にとっても退屈しないので見ているボランティアや入居者も退屈しない。2頭よりも3，4頭の方が良いと思われる。ただそれ以上に頭数が増えると目で追うのに忙しく，吠え合うと恐怖感が強まるので3，4頭が適当と思われる。

3－1　学生ボランティアへの影響

本試験で学生ボランティア21名に行ったアンケートの結果が次のように得られた。(図5，6，7，8，9)

まず①「気分」について，介護体験終了後と犬展示3日目終了後に良好な気分であると答えた学生が多く，犬展示1日目終了後に「気分良好」と答えた学生数は他の2日より少なかった。②「心身状態」について，介護体験後に身体的に疲れたと感じた学生が多かったが，子犬展示1日目終了後に精神的疲労や後悔，無気力を訴えた学生が最も多く，①気分の結果に一致した。③ボランティア活動への感想からは，すべてのボランティア学生が介護体験日と犬展示3日目当日が充実してお

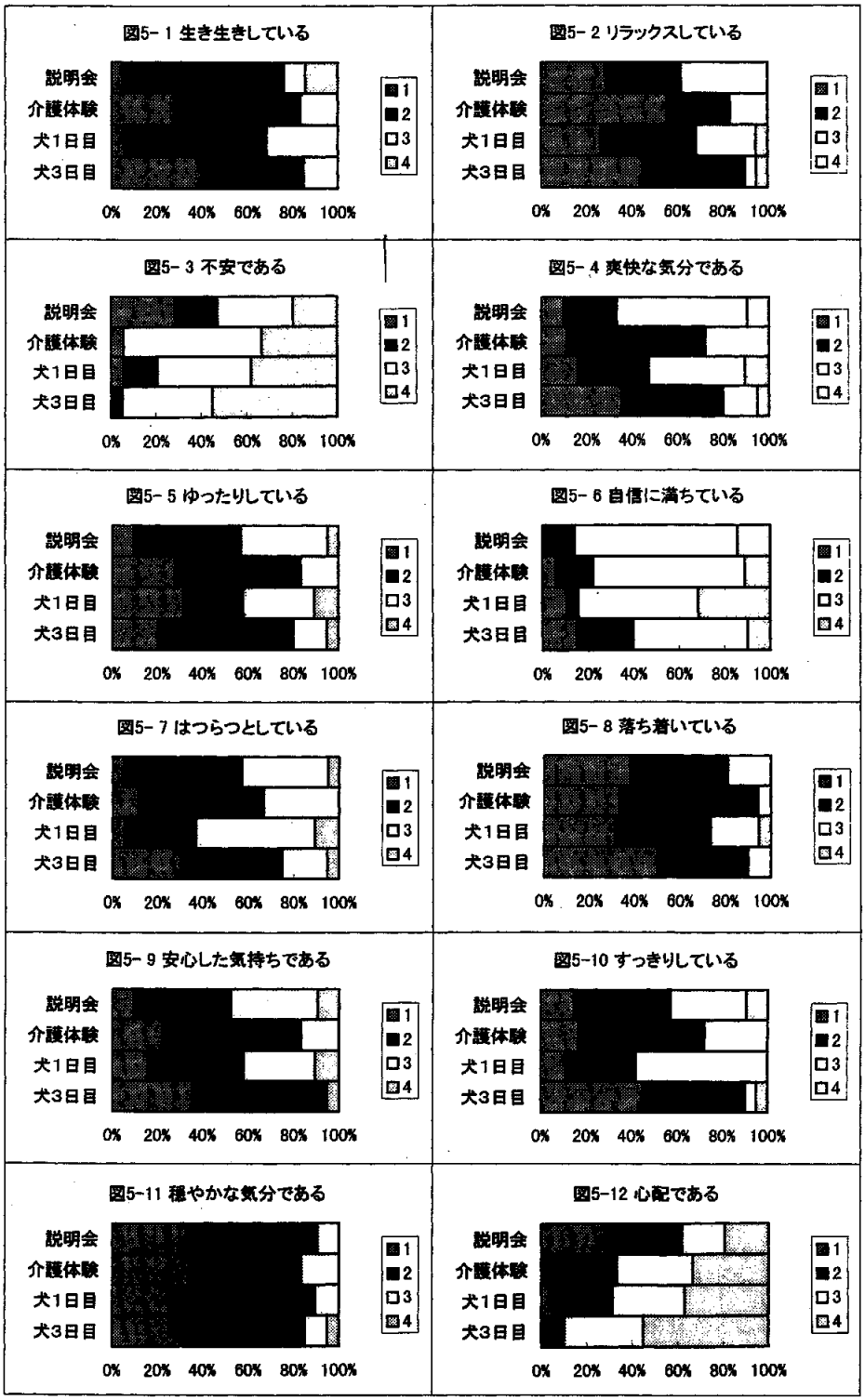


図5　学生ボランティアの介護終了後の気分

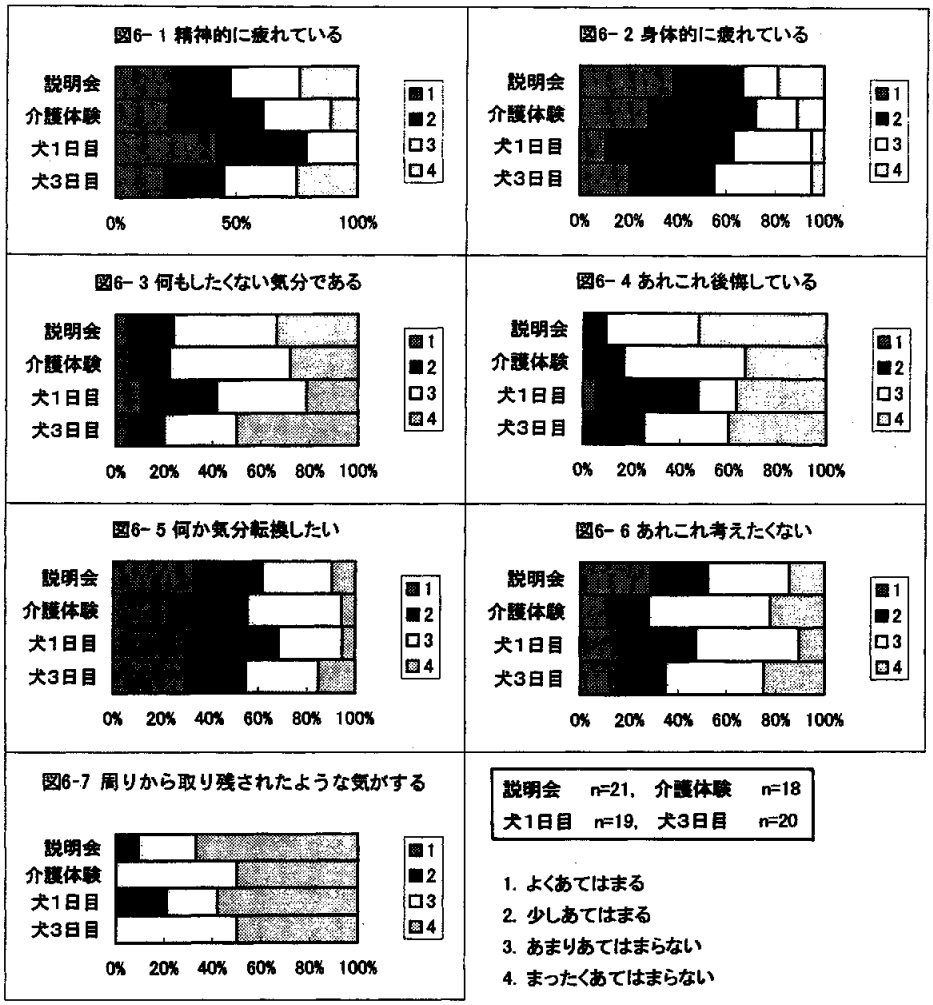


図6　学生ボランティアの介護終了時の心身状態

り，子犬展示3日目には60%以上の者が自分の力を発揮でき，入居者との会話で心が和んだり，役立つことを見い出した，と回答した。しかし，介護体験日と犬展示1日目では，入所者と何を話していいのか分からないといった戸惑いや声掛けの難かしさを訴えた学生が多かった。④ボランティア活動に対する意欲について，介護体験後と犬展示3日目にほとんどのボランティア学生が今後も今回のような活動を続けたいと答えた。活動日数が増すにつれて，「困っている人を助けられる」，「世の中に貢献する力がある」，「他人の役に立つことができる」などの自信を感じた学生が増加した。また介護体験後と犬展示3日目には，ほとんどの学生が「ボランティアに関する知識や技能があればもっとうまくできたか」の質問に対して「そうだ」と答えた。⑤高齢者問題への関心度の結果から，犬展示3日目にほとんどの学生が高齢者への理解を示した。

Ⅳ 考　察

特別養護老人ホームにおいては，入居者の子犬展示場所への移動は自主的に犬の展示場に移動できるか否かの能力や犬の訪問があることへの認識および介護者の誘導の有無に大きく左右される。

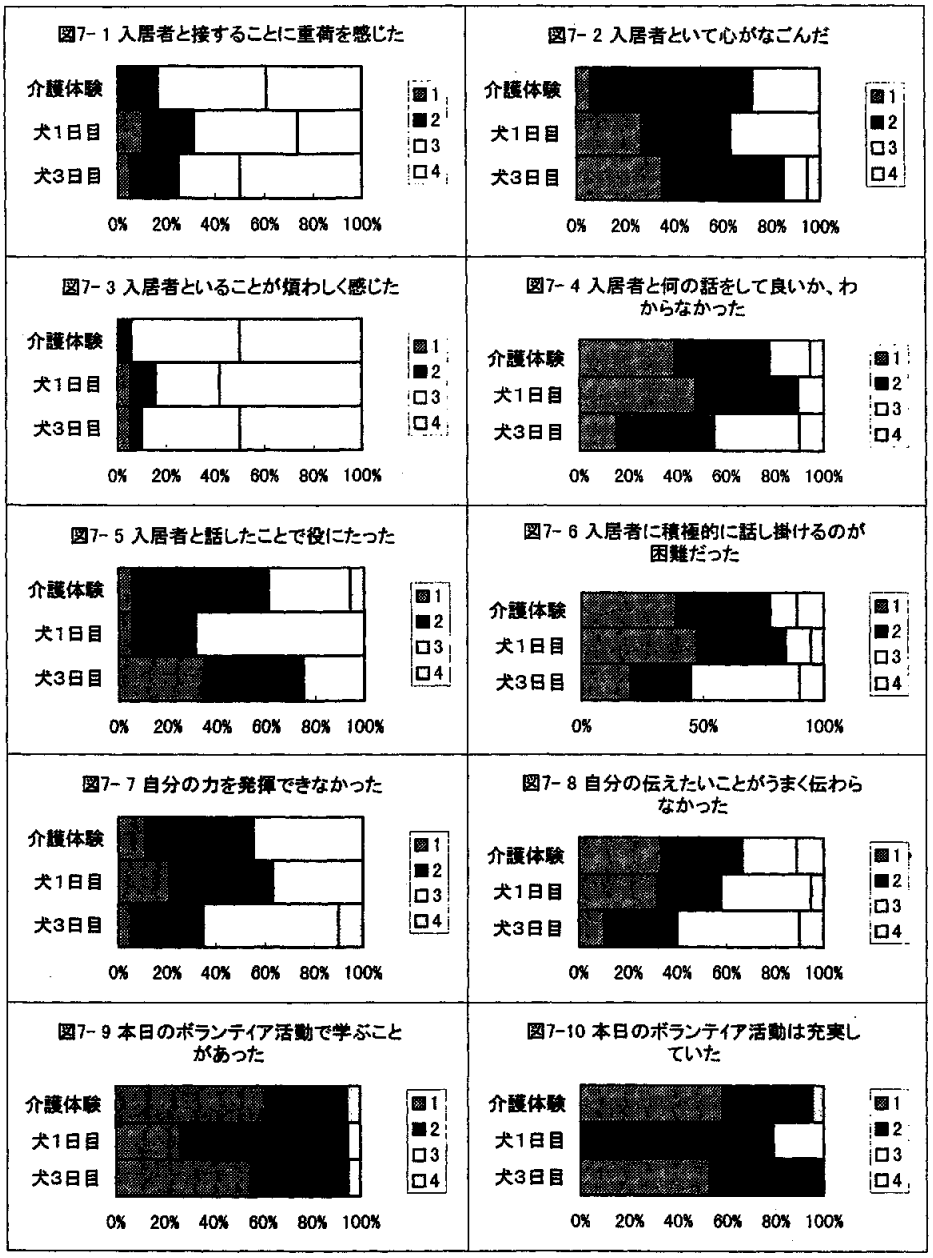


図7　学生ボランティアの当日の活動に対する感想

子犬展示場所への参加者の比率と表情の良否との関係は少ない。参加者のうち50%が「犬は好き」と答えているが，反応が明らかに良いと判定された数はこれを下回っていた。これは犬への好感度を調査した時点より参加した時点での体調の低下などが大きく影響しているものと考えられる。しかし，反応書面記録と録画から入居者の30%が「反応明瞭で良好」と判定されたことはQOL向上のための犬の活用が有用であることを示唆しており，今後，犬訪問活動を考える際の対象者数を

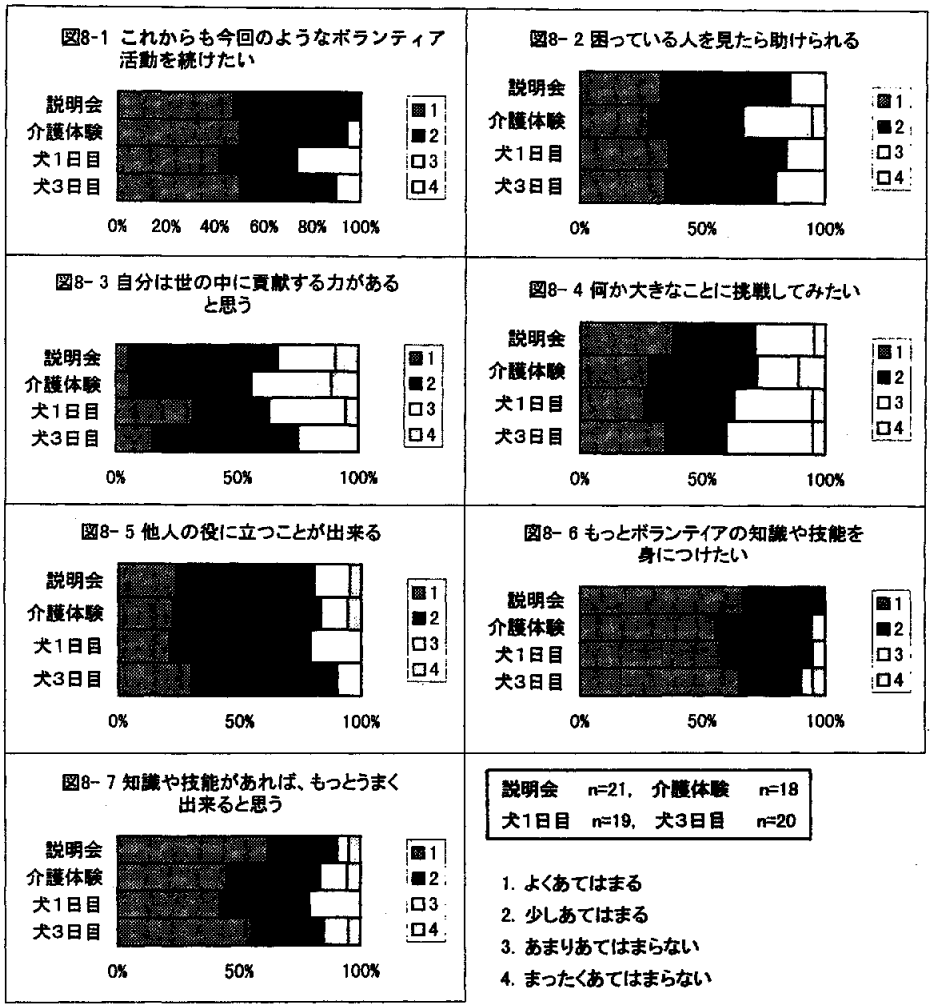


図8　学生ボランティアの今後のボランティア活動に対する意欲

予測する上で有用な資料になるものと考えられる。

入居者と子犬とのコミュニケーションには，眺める（視覚的），抱く（接触的），餌を与える（与える側の主体性が強く求められたうえで起る相互作用）,玩具（紐や骨ガムなど）で子犬をからかう（相互作用）などがある。Eberhard Tremler (1996)[3] は著書「犬の行動学」の中で，子犬の発育を，1－2週齢（新生児期－植物状態），3週齢（移行期），4週齢（4－7週齢は刷り込み期），6週齢（4－7週齢は刷り込み期），8週齢（8－12週齢は社会性を身に付ける時期），10週齢（8－12週齢は社会性を身に付ける時期），12週齢（8－12週齢は社会性を身に付ける時期），16週齢（13－16週齢は子犬間階級確立時期），5－6ケ月齢（群内での階級が定まる時期），7ケ月以降思春期そして9ケ月出産可能な時期に分類している。今回の観察では新生児期の子犬は動きが乏しく，人に働きかける動作が少ないので，入居者達は不思議そうに覗き込んでは会話することが多かった。膝の上に載せると女性は容易に受け入れるが，男性は多少の戸惑いを見せた。非常に犬好きの痴呆の重度な入居者はこの段階の子犬を抱いても犬と認知出来なかった。しかしこの人は6週齢の子犬を見たとたん「ワンコちゃん」といって抱き上げ

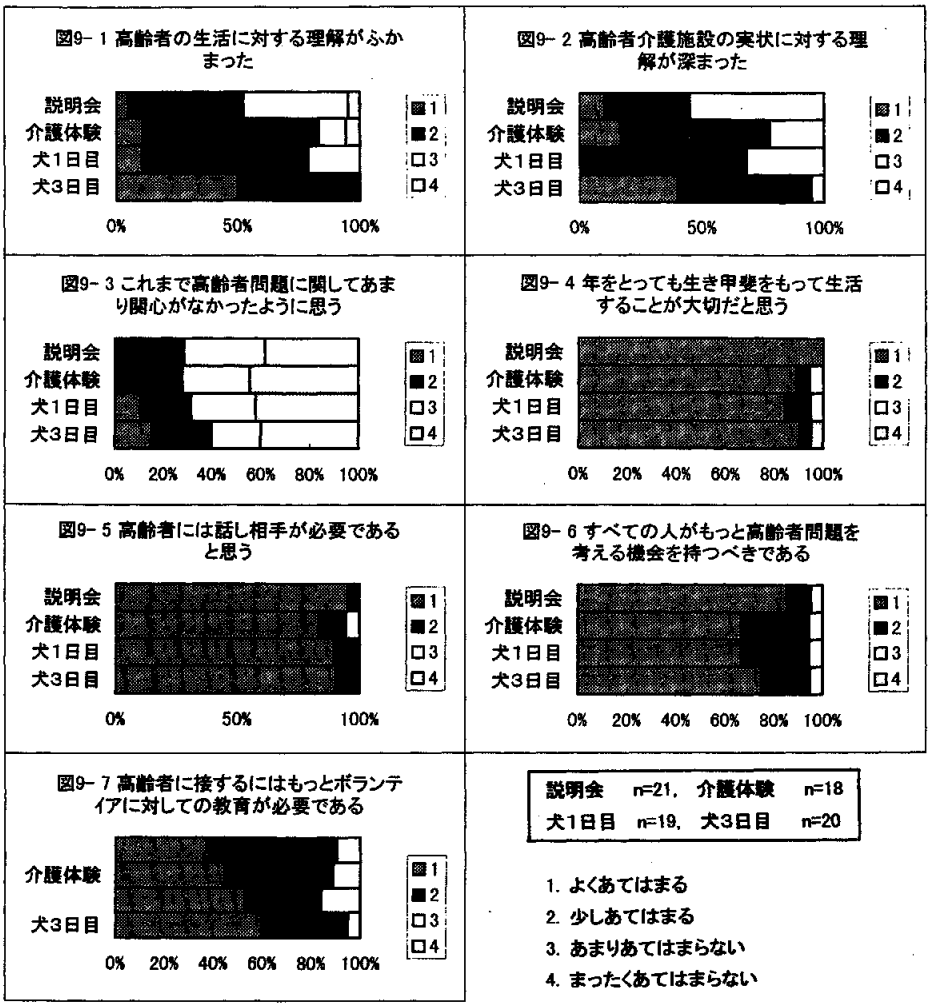


図9　学生ボランティアの高齢者問題への関心度

た。4週齢から6週齢の子犬は社会性を発現し，人を選ばずにメッセージを発する。まだ小さいので抱いてよし，行動が少し活発なので眺めても良い。また少しづつ遊べる時期であった。犬が嫌いであるといっても子犬ならば恐怖心がなく，場合によっては抱くことも出来た。8週齢以降は行動が活発になり，入居者が抱いて温もりを楽しむためには適当ではなくなった。むしろ人との交流行動が旺盛になるので入居者にとっては子犬とのもののやり取りを介した遊びが可能となった。この時期は，遊べて，それを皆で眺めて談笑できる最適な時期であった。手の萎縮した人，声のほとんどでない人でも普段は認められない手の積極的な動きや大きな発声が認められた。このように各週齢毎に子犬の特性が変化してゆくので，子犬の特性に応じた入居者との組み合わせを考えると，より豊富な子犬活用計画が可能と思われる。

今回の特別養護老人ホーム入居者に対する聞き取り調査では，回答を得ることが極めて困難であった。そこで録画と書面反応記録を用いた介護者による反応の判定を行い，補足するデータとして子犬展示場所での滞在時間を記録し，反応の良否と共に子犬展示の効果を把握することを試みた。その結果，興味深いことに40分間以上滞在する入居

者達は，痴呆度が進んでいるが自力歩行が可能な人であり，子犬の好き嫌いを問わず，子犬展示場所に来ると日常とは別の話し相手が得られる，安心感が得られる，といった理由で滞在しているなど，社会的な要因も関係しているように思われた。今後，入居者の状態をいくつかに群分けし，それぞれの要求に沿った子犬の活用法を検討することも必要である。

学生ボランティアの反応では，介護体験日と子犬展示3日目において次回のボランティア活動に対する意欲を示す学生が多く，有意義なボランティア活動が行われたことが示された。介護体験日では入居者との対話がうまく出来なかったと答えている学生が多いのに活動の充実を報告しているのは，指示された実行内容が明瞭であり，遂行できた達成感が対話の失敗から来る不安感を凌駕し，総合的に良しと判断した結果と思われる。他方，子犬展示1日目の活動に良い評価をしなかった学生が多いのは，子犬がいてもそれが直ちに入所者との対話を発展させることには繋がらなかったことに起因している。感想文で見ると子犬訪問前の高齢者介護の経験の程度によって内容が異なっていた。この調査以前に介護体験がないボランティアは，対話が出来ず戸惑っており，じっと子犬だけを眺めるかボランティア同士だけで会話していた。短期間でも介護体験だけがあるボランティアの場合は，高齢者との対話のなかに「犬」に関する話題をどう取り入れたら良いのかを悩んでいた。イヌを考慮しない方が入居者との対話がやり易い，との感想が聞かれた。この施設で介護の実体験が半年以上あるボランティアの場合は，子犬の存在によって入居者の残存能力が引き出されることに驚嘆しており，この能力を積極的に治療に利用出来るのではないか，との指摘をしている。彼は入居者に「ワンちゃんに餌をやってみませんか」と声を掛け，麻痺で縮んだ右の掌にドッグフードを少し乗せて，手が伸びてきたことを効果として気づいている。

ボランティアのアンケートと感想文からはボランティア活動の実施方法の問題点が読み取れた。すなわち子犬展示1日目終了後に「もっと技能や知識があればうまくやれた」と反省する学生が少なくなかった。このことは問題点がボランティア学生自身の知識や技能にではなく，子犬の訪問活動未経験あるいは高齢者介護未経験の学生にいきなり子犬を介在させて入居者との対話を求めさせたことにあった。介護体験の蓄積により入居者の状態，気持ちが理解でき，何か援助が出来ないかと考えられる段階になって初めて「子犬を介在させたらどんな効果があるのか」と問うべきであった。このような欠陥があったが，幸いなことに子犬展示3日目のアンケート結果には，ボランティア活動を3日間の体験の積み重ねで対話が少し出来るようになったことや犬介在の効果を少し実感し始めたことで今後も動物介在活動に参加したい希望が述べられていた。

今回の研究では子犬の訪問活動を施設の行事として積極的に活用する方法を探ることにあった。子犬が入居者を精神的に昂揚させているのは確かであったが，犬嫌いの人も引き寄せていたのは子犬の動きと集まった人との渾然一体となった談笑の輪であった。そして，その楽しい場を演出できたのは入居者に対する理解，子犬に対する愛情，遊び心をもった陽気なボランティアであった。子犬に対する要求は，アトラクションとして期待する，寂しさを紛らわしたい，不安を解消したい，子犬の温もりを静かに求めたい，と多様であった。またその要求の背景には入所前の生活歴，動物との関わり歴，施設内での人間関係，など実に多様な要因を含んでいるように思われた。

今後は，子犬の行動と個々の入居者の反応とを照合させることによって，子犬の発育にともなう行動様式が入居者にどのような表情の変化をもたらすのか，ボランティアはどのように演出するのが効果的なのかを，調査対象を絞り込んで解析をすすめたい。

V　まとめ

特別養護老人ホームへの子犬を連れた訪問活動が入居者とボランティアにおよぼす影響を調査した。生後4，6，9，10，11，12週齢の子犬を1－4頭づつ幅180cm，奥行き65cm，高さ60cmのアクリル製囲いに入れて10－12時と13－16時に展示し，時折入居者の膝に載せて接触させた。入居者78中66名が参加し，参加者の36%が子犬あるいは展示場所の談笑に対して明瞭な陽性反応を示した。子犬展示場所での一日の滞在時間が40分間を超えた入居者は，痴呆度が進んでいるが自力歩行が可能な人であり，子犬の好き嫌いを問わず，子犬展示場所に来ると日常とは別の話し相手が得られる，安心感が得られる，との理由で滞在していた。

介護体験のないボランティアは子犬展示の初日には入居者との意思疎通が不充分で，精神的な倦怠感を訴えた。3日間の展示の後にようやく充実感を感ずるようになった。訪問に参加するボランティアには障害をもった入居者を理解するための事前の介護体験をより多く課すことの必要性が示された。

VI　謝　辞

本研究の調査に快くご協力頂いた社会福祉法人協立いつくしみの会特別養護老人ホーム「かりぷ・あつべつ」板宮忠施設長，川島亮平医師，石山薫生活相談員はじめ関係者各位，参加されたボランティアの諸氏，書面記録担当の釣ひとみ，向後亜希，諸富ゆたか，渡辺有希子，ビデオ録画担当の小川めぐみ，田中香織，子犬提供の清水目来実子の諸氏に厚くお礼申し上げます。

VII　文　献

1）高柳友子：動物介在療法 Animal Assisted Therapy，「老年学大事典」667－676，西村書店（1998）

2）長谷川美栄子：実践報告　コンパニオンアニマルと高齢者のQOL，石狩管内老人福祉協議会・札幌市老人福祉協議会主催平成8年度民間福祉施設職員研修会資料，7（1997）

3）Eberhard Tremler：子犬から成犬へ，渡辺格訳「犬の行動学」，11－66，中央公論社（1996）